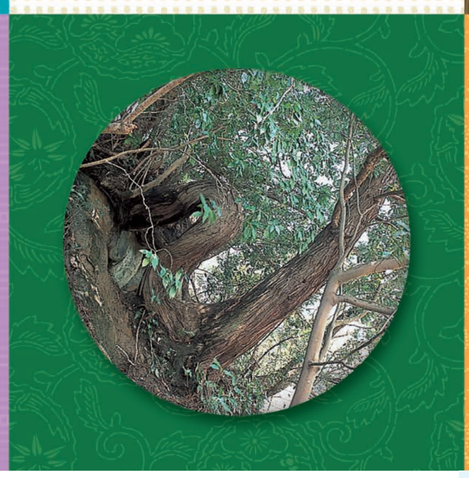
【発行・編集】
平成26年3月31日
東海村教育委員会　生涯学習課
〒319-1192 東海村東海三丁目7番1号
TEL:029-282-1711(代)

「石神城跡」

東海村文化財マップ



有形文化財

人物埴輪(県指定)

出土場所：舟塚1号墳
構　造：現高78.5cm

三角形の天冠をつけ、三角板の短甲を思わせる文様が全面に見られ、やや誇張した草摺がスカートのように広がって表現される。顔には赤や黒味の着色があり、髪は美豆良に結われ、腕には手甲がつけられている。造りは極めて精巧で、本県を代表する埴輪である。

堀米A遺跡出土翡翠製大珠(村指定)

出土場所：堀米A遺跡
構　造：翡翠製大珠5点
①長さ 11.2cm 重量 170.6g
②長さ 5.4cm 重量 28.6g
③長さ 4.3cm 重量 13.0g
④長さ 5.6cm 重量 72.8g
⑤長さ 7.15cm 重量 94.7g

縄文時代中期の精神文化や翡翠の原産地糸魚川との交易などを想定する資料として良好であり、学術的に高い価値を有する。すべて、照沼小学校改築に伴う発掘調査で出土したものである。

釜付遺跡出土遺物(村指定)

出土場所：釜付遺跡
詳　細：手捏土器77、剣形品196、有孔円板126、勾玉4、臼玉2、青銅製儀鏡2、鉄刀1、土師器55

五世紀初頭のものと考えられ、本県で類を見ない祭祀遺跡の出土品として学術的価値が極めて高い。特に、直径3.3cmの青銅製儀鏡は古代文化を解明する上で注目される。

絹本著色聖徳太子絵伝(県指定)

制作年代：室町時代
構　造：絹本著色、掛幅装(縦91㎝、横35㎝)

画幅の下から上にかけて、太子2歳「合掌して南無仏を唱う」、12歳「日羅の帰国」、「孝養像」、「勝鬘経講讃図」を描く聖徳太子略絵伝である。聖徳太子略絵伝とは、太子の事跡場面の中から4、5場面だけを取り出して一幅の掛幅形式としたもので、門徒たちへの太子信仰の絵解きに用いられたものと考えられる。初期真宗教団に関する数少ない資料として重要である。

存在が歴史を語る

武人埴輪(村指定)

出土場所：動燃東海事業所地内
構　造：現高 62.5㎝

衝角付冑を被り、左腰に太刀をさし、挂甲を着用し籠手を装着している。太刀及び武具には青色顔料が塗られている。6世紀中葉の埴輪と考えられ、県内でも有数の精巧品である。

常州埴田五所大神宮縁起・埴田神宮年中行事并末社記(村指定)

構造：常州埴田五所大神宮縁起・埴田神宮年中行事并末社記を紙本一巻に収めてある(縦40.6㎝、幅820㎝)

〈常州埴田五所大神宮縁起〉
御祭神が当地に祀られるようになった由来について元禄15年(1702)に丸山可澄が記したものであり、貴重な歴史資料である。

〈埴田神宮年中行事并末社記〉
年間の行事が記されており、特に、毎年4月7日に行われたヤンサマチについて記録されている点が注目される。ヤンサマチとは、那珂郡内の四十数か村から神輿が平磯海岸の清浄石や酒列磯前神社に神幸し、村松大神宮から出発する6頭の馬によって行われる競馬神事も実施された那珂郡一体を舞台とする盛大な春の神事である。東海村におけるヤンサマチの最も古い史料として貴重である。

土偶(村指定)

出土場所：御所内貝塚
構　造：全長17.8cm

呪術的な文様が両面に施された完全な形の土偶であり、一般には木菟土偶と呼ばれるタイプである。縄文時代の土偶が完全な形で発見される例は少なく、本県にほとんど類例がない優品である。

直刀および三輪玉(村指定)

出土場所：石神外宿中道前の畑中で発見された石棺内
構　造：[直　刀]鉄製(茎尻から切先まで110.5㎝、棟から刀先までの巾・把部4.5㎝、中央部3.9㎝、鋩子付近で3.5㎝)
[三輪玉]金銅製8個(直刀に装着した装飾品)

5世紀中葉から6世紀初頭のものと考えられ、古墳時代の遺物として学術的価値が高い。

民俗文化財

十王像および奪衣婆(村指定)

製作：享保16年(1731)
構造：十王像10軀、奪衣婆1軀、ヒノキ材、一木造、彩色、像背面に「再興施主・大和田伝左右衛門」等の銘文がある
高さ：秦広王38㎝、初江王39㎝、宋帝王38㎝、五官王39㎝、閻魔王42㎝、変成王38㎝、泰山王39㎝、平等王40㎝、都市王37㎝、五道転輪王36㎝、奪衣婆33㎝

十王とは、冥界にあって亡者の罪業を裁く王である。初七日、二・七日、三・七日、四・七日、五・七日、六・七日、七・七日、百か日、一年忌、三年忌ごとにそれぞれの王が裁く。奪衣婆は、三途川のほとりにいて亡者の衣服を脱がせとる老女で、如意輪寺では「しょうろくばばあ」と呼んでいる。

人々の祈りをかたどる

鐘馗霊神絵馬(村指定)

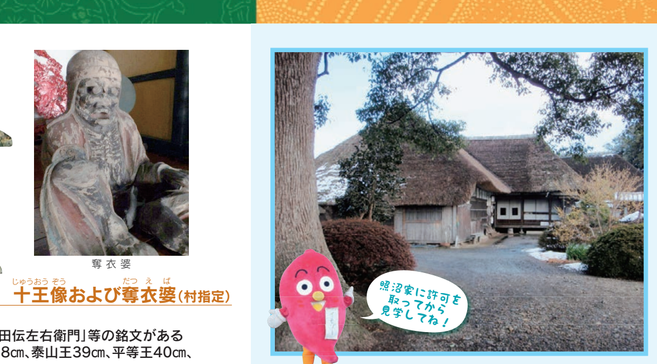
構造：杉材、木版絵画、彩色
幅200㎝、高さ(最大)150㎝、厚さ(枠共)4㎝

延宝3年(1675)悪疫が大流行して人々が大いに苦しんでいた時、藤原高信が百か日の間沐浴潔斎して精魂を注ぎ描き上げたものと伝えられる。県内で最も大型なものに属する絵馬である。鐘馗霊神とは疫鬼を退け、魔を退くという神であり、今でも崇敬されている。昭和初年頃まで、村の若衆たちがこの絵馬を担いで村中をまわり魔除けや厄払いをする「鐘馗さまの村まわり」が実施されていた。

霊験木(村指定)

構造：松材、長さ91㎝、幅10.5㎝、厚さ4㎝

元禄二年(1689)遭難船を救ったという伝承を持ち、安政年間に書かれた「加藤寛斎随筆」にも記されている。木片の表面には墨書、裏面には刻字があり銭53枚(寛永通宝51枚、祥符通宝1枚、不明1枚)と木綿糸で結んだ少量の頭髪も現存する。太平洋の荒波の中、遭難した人々が頭髪を切り銭53文の穴に通して木に釘で打ちつけ海に流して村松虚空蔵尊に祈ったのであろう。村松虚空蔵堂ではこれを寺宝としている。



時代を見守り続ける山横目の家

国登録有形文化財

照沼家住宅主屋

茅葺・寄棟造で、南側に曲り部分が張り出し、東端に書院が突出する、大型で変化がある曲り屋形式の豪農住宅。建設年代は江戸時代後期(18世紀後半～末)。

照沼家は、水戸藩時代の後半、那珂郡照沼村・長砂村・村松村・石神白方村・平磯村など計10ヶ村の山横目(大庄屋)であった。書院の床柱には刀傷が残されており、幕末の天狗諸生の争いにて付けられたものと伝えられる。

史跡めぐり　東海村の古墳群を巡る

久慈川エリア　～よみがえる古代の人々～

中道前古墳群

久慈川に向かって張り出した標高20mほどの台地上に位置する。東海村指定文化財である直刀及び三輪玉が出土した古墳群である。かつては五基以上古墳が存在していたとされる。現在は、別当山古墳、座応権現山古墳、石神小学校敷地内に茅山古墳の前方部が残されている。

別当山古墳(村指定)
【円墳、直径52m、高さ8m】
規模、保存状態ともに茨城県北部久慈川流域の代表的な古墳であり、重要な歴史的意義を有するものと思われる。

茅山古墳(石神小学校内)

白方古墳群

久慈川右岸の氾濫原を見下ろす台地上に構築された古墳群。現在は東海村立白方小学校が所在しているが、数基の古墳が学校敷地内及び、白方コミュニティセンター前に残されている。

白方古墳(白方小学校内)

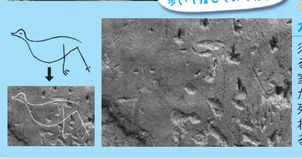
真崎浦エリア　～水鳥が運ぶ人々の祈り～

須和間古墳群

真崎浦を望む須和間台地の南端に位置している。真崎浦の突出する尾根上には古墳時代初頭の方形周溝墓群も所在する。

水鳥の線刻壁画

須和間12号墳は凝灰岩による横穴式石室であり、その玄室内側壁から線刻によって描かれた水鳥が発見された。死者の霊魂が鳥によって運ばれるという古代人の死に対する観念に関連するとされる。



細浦エリア

真崎古墳群

細浦に面した標高28mほどの台地上に立地する東海村最大の古墳群。その中で最大の古墳が権現山古墳である。また、古墳群から細浦へ下る西側の崖面には真崎横穴群が存在し、古墳時代以降この場所を支配者たちが継続して墓域として利用していたことが分かる。

真崎横穴群
7世紀～8世紀に築造されたとされる。

権現山古墳(村指定)【前方後円墳、全長87m、後円部直径45m、高さ5.5m】
村内最大の前方後円墳で南側の一部を除いて墳丘はよく保存されている。尾根上を利用して作られたものでこの地域の古墳を理解する上で極めて重要である。出土したタタキ目埴輪片は県内で数少ない資料として注目される。

舟塚古墳群

前方後円墳2基、円墳2基以上で構成されていたとされる村内中心部の台地上に位置する古墳群。現在は、舟塚2号墳、狐塚古墳が残る。舟塚1号墳からは、県指定文化財である人物埴輪が出土している。

舟塚古墳群2号墳(村指定)
【全長約75m、前方部幅約40m、高さ7.39m。後円部径約44m、高さ7.59m】
保存状態が良好であり、6世紀代の築造と考えられる。

真崎古墳群

城跡　中世のロマンにひたる

石神城跡(村指定)

石神城は東海村の北部に位置し、久慈川を望む突出した丘陵の先端を利用して築城され、水運を押さえる機能を有していたとされる中世の城跡である。石神城が歴史上に名前を現すのは、1432年の石神城合戦の時であり、15世紀末に石神小野崎氏が佐竹氏より石神の地を預けられ居城するようになったと言われている。その後、1602年に佐竹氏が秋田に移封された際に石神小野崎氏も従って秋田に移ったため廃城となった。

真崎城

細浦に張り出す岬に造られた城で、佐竹氏の一族である真崎氏の居城とされる。真崎氏は石神小野崎氏と共に中世後期の東海村域を支配していたとされるが、確かな文書は存在していない。いまだに謎が多く残る城である。

文化的景観　人と自然の共同作品

近代日本開墾技術の発展の歴史を示す

真崎浦

真崎浦は古くは海とつながっており、中・近世は村松沼や素絹の沼と呼ばれ、そこで採れる魚やレンコンは周辺の農民を支えていた。しかし、真崎浦の水面は海水面よりも低く満潮時になると海水の逆流がたびたび起こった。さらに海からの風で吹き上がった砂により水路が埋まり、大水には水があふれ沿岸の村々を苦しめていた。そのことを知った那珂湊の酒造家であった西野長次郎は真崎浦の干拓を水戸藩に願い出て、この地に移り住み干拓に着手した。干拓はその後数々の困難に見舞われたが、幕末から昭和にかけて4度の干拓が行われ、昭和13年に完成した。

真崎浦干拓事業舟着場跡

西野家の池水回遊式築山庭園跡で西野長次郎はここから小舟を出して干拓事業の指揮に赴いたとされる。

人々の努力が造った白砂青松

村松砂防林

かつて大風により村が砂で埋まってしまったという千々乱風伝説を持ち、潮風、飛砂の被害が多かった村松海岸は大正7年に「海岸砂防林造成二関スル試験地」に選ばれたことを契機に砂防林造成工事が始まり35年の歳月をかけて植林を行い、見事な黒松林が誕生した。村松海岸の砂防林植栽事業は指導的役割を果たした河田博士の名から「河田式」と呼ばれ、日本の海岸砂防技術の基礎となった。現在も見事で美しい黒松林が私達を守っている。

水戸八景「村松晴嵐の碑」(村指定)

水戸藩9代藩主徳川斉昭が天保4年(1833)水戸八景の一つとして選定。翌天保5年～8年に建碑されたと思われる。自然石に書かれた「村松晴嵐」の文字は徳川斉昭筆によるもの。かつては石のおもてが常に濡れていたため「濡れ石」とも言われる。現在は、海岸線が遠のきその眺望は失われているが、かつての風景を忍ばせる。

※文化的景観とは…地域の人々の生活・生業により作り出された景観のこと。

天然記念物　村指定文化財

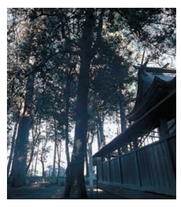
如意輪寺の常緑照葉樹：スダジイ、タブノキ

(スダジイ)
目通り/東側5.7m、西側4.5m
枝高/東側15.0m、西側15.0m
樹齢/およそ300年

(タブノキ)
目通り/東側5.7m、西側4.5m
枝高/東側3.5m、西側3.5m
樹齢/およそ300年

如意輪寺にはスダジイ、タブノキの巨木が各2本ずつある。スダジイ、タブノキ共に樹勢旺盛で枝張りも良く、県内でもこのような巨木になるのは稀である。

住吉神社のサカキ



目通り/1.66m、枝高20.0m
樹齢/およそ300年

茨城県内にもサカキの自生は見られるが、胸高直径は30cm以下のものが多く、あまり大木にはならない。このサカキは植栽されたものと思われるが、亜高木としては巨木に類するものであり、樹勢も旺盛で枝張りも良く、県下有数のサカキである。

願船寺のイチョウ

目通り/6.1m、枝高25.0m

樹勢の旺盛な雌株で、枝張りが良い。地上約2.5mの所に乳柱も見られ、イチョウの巨木としての特徴を備えている。親鸞上人お手植えのイチョウと伝えられている。

エノキ

目通り/4.2m、枝高20.0m
樹齢/およそ300年

雌雄同株で4～5月に淡黄緑色で小さな花が咲き、10月に赤褐色の核果がなる。エノキは元来、里塚や村境に植えられ、目印とされた。

カヤ

目通り/4.15m、枝高25.0m
樹齢/およそ300年

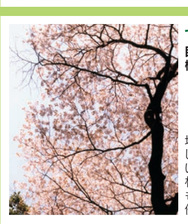
このカヤは雌株で、種子の生産はよいがやや小形である。東側、西側、南側の枝張りがよく、樹勢、樹姿ともに優れており、平地における カヤとしては大木に属する。

モチノキ

目通り/2.9m、枝高10.0m
樹齢/およそ300年

地上1.2mの位置で2本に分岐し、一方は更に地上1.5mの位置で分岐し、3主幹が直立する形となっている。樹冠が円形になり、樹勢、樹姿ともに優れた大木である。

ヤマザクラ



目通り/4.85m、枝高18.0m
樹齢/およそ200年

地上約1.4のところで分岐し、3本の主軸を形成している。東側、西側、南側の枝張りがよく、種子の生産も良い。樹勢、樹姿ともに優れた大木である。

登録文化財

東海村「ふるさとの自然・文化」

1 人々を魅了する花木の女王
キリシマツツジ(ツツジ科)
樹齢(推定)：300年。
屋敷内に栽培されている常緑の花木で、根本から10本の株立ちであり、枝張りは東西に1.7m、南北に5.0m。春の花の時期には数多くの赤紅色の花を咲かせて訪れる人を魅了している。

2 永遠に雌雄相並ぶ
カヤ(イチイ科)
樹高は20mを超す。庭内の雌樹の幹周りは4.0m、雄樹は3.4m。雌樹の枝張りは東西に23m、南北に22mと繁茂した樹形をみせる。山地に自生しているが庭樹としても植えられる常緑の高木で雌雄異株である。花期は4～5月頃、種子が熟するのは翌年の晩秋である。

3 緋に燃える花むら
キリシマツツジ(ツツジ科)
整備された庭園に栽培されている常緑の低木で、樹高3mほど。根本から27本の株立ちを見せ、一番太い幹の外周は27cmある。春に赤色の花をたくさん咲かす。この様のように監視し見事に数多く花をつけるものは稀であろう。

4 秋を運ぶかおり
キンモクセイ(モクセイ科)
樹高はおよそ10mあり、幹は太く、よく枝分れし、葉を密につける。晩秋、葉の付け根あたりに花柄のある多数の橙黄色の小さな花を咲かせ、強い芳香を放つ。

5 神宿る老樹
石神社のスギ(スギ科)
幹が直立してそびえ樹高20mほどになる。スギの名は幹が直立していることによる。すは直、きは木と見なせるし、すぐすぐと立つ木ともとれよう。

6 直幹、長寿の樹
石神社のスギ(スギ科)
樹齢(推定)：350年。
神域に保存されている。石神社の鳥居の左手に育ち、遠望できる。樹勢は強く実の数は神域の他のスギを圧している。

7 なつかしい甘味
ケンポナシ(クロウメモドキ科)
樹齢(推定)：300年。樹高25m。7月頃に枝先に多数の淡緑色の小さな花を房のようにつける。花の後、種子を含む実の部分は肉質に太くなった花の柄とともに地上に落ちる。果実そのものは食べられないが、果柄は甘みがあって食べられる。ふるさと里山の味である。

8 ピンク色の二段咲きの花
サツキ(ツツジ科)
全体的に枝振りが良く、梅雨期に枝先に二段咲きで紅紫色の花を開く。花冠は大きくろうと状で、ちつに裂け、濃紅紫色の斑点がある。

9 ふるさとは地中海の島々
オリーブ(カンラン科)
常緑の葉は対生、長楕円形で肉質は厚く光沢がある。5月から7月にかけて芳香のある黄色味を帯びた白い花をつける。12月から1月、黒紫色に熟した果実からオリーブ油がとれる。北関東地方で栽培され結実する例は珍しい。

11 堂々たる風格を備えた老樹
ヤブツバキ(ツバキ科)
樹齢(推定)：300年。樹高17m。久慈川右岸に残存する照葉樹林の中に育つ巨木で、堂々たる風格を備えている。春の盛りに紅色の花を咲かし、実もよくなる。花にはメジロなどが訪問し蜜を吸う。根際には氏神様が配置されている。

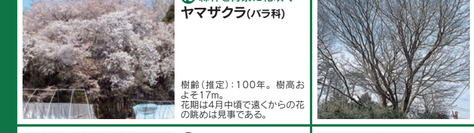
12 切り株から分かれた幹が育つ
ホオノキ(モクレン科)
日本特産の落葉高木で樹高はおよそ20m。斜面地にあって地表面から5本の太い幹と9本の細い幹とが株立つ姿は地際で伐採されて放置された切り株から芽吹いて育ったものと推測される。5月頃枝先に香りのある黄色味を帯びた花径15センチほどの花を咲かせる。

13 杉林に座する老山桜
ヤマザクラ(バラ科)
樹齢(推定)：100年。
杉林の中に一本独立樹のようにそびえる。4月初め、たくさんの花は赤褐色の新葉と同時に出て、淡紅白色の3個からも個の束になる。

14 芯が枯れて神化
スギ(スギ科)
樹齢(推定)：300年。樹高30m。住吉神社の神域にそびえる。幹をたたくと内部に空洞があるのか鞍い音が戻ってくる。

15 境木として残された見本樹
クヌギ(ブナ科)
樹勢は良好で、枝際から地上10mはどまでは直幹でその先の枝張りは良好だ。樹肌には縦長の網目模様が明瞭で白色の地衣類の点在がある。生育期間中に一度も伐採された形跡が無く、地目の境木として残されたようだ。

17 地上根は何本あるかな
クヌギ(ブナ科)
樹高およそ20m。直幹の地上10mあたりからいくつも枝が出る。雌雄同株で5月に開花し、翌年の秋には実は成熟してドングリとなる。かつての平地林の面影を偲ばせる見事な枝振りの一樹である。



18 森林を背景に花咲く
ヤマザクラ(バラ科)
樹齢(推定)：100年。樹高およそ17m。
花期は4月中頃で遠くからの花の眺めは見事である。

19 樹冠、のびのびと
エノキ(ニレ科)
樹齢(推定)：80年。樹高およそ18m。
樹勢は見事で枝張りや葉の繁りに主幹のたくましさを見せている。春に淡黄色の細やかな花を開く。

21 歴史を刻む樹肌
シラカシ(ブナ科)
樹齢(推定)：200年。樹高はおよそ18m。胸高直径は0.9m。風雪に耐えた枝張りは見事。

22 逆境を生き抜く姿
アカガシ(ブナ科)
樹齢(推定)：300年。樹高およそ18m。胸高直径およそ1m。神社境内の植栽された杉林内に生育する老樹。5月下旬から新葉とともに多数の長い尾状の花穂が群がって咲く。

23 寄り合い結びついた珍木
サカキ(ツバキ科)
樹齢(推定)：300年。樹高およそ16m。胸高直径0.45m。関東地方以西の山林中に生える常緑の高木で、時に神社の庭や墓地に植えられる。根元から1.7mの部で二分し、幹の3分の1ほどで結合し、また二分するという変わった形は接近して育った2本の樹が部分的に接合した珍しい例である。

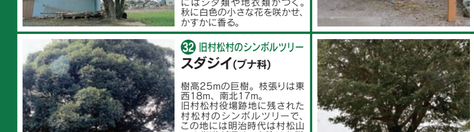
25 根元から三本立ちの威容
ヒイラギ(モクセイ科)
樹齢(推定)：300年。樹高10m。幹は根元のあたりから三本に分かれ、最大のものは根元の部分が空洞になり、幹の表面にはシダ類や地衣類がつく。秋に白色の小さな花を咲かせ、かすかに香る。

26 横に這う枝張りの妙
クロマツ(マツ科)
樹齢(推定)：350年。樹高2.2m。枝張りは東西に伸びて17m。クロマツの生命力のたくましさを見せていて見応えがある。

27 調和・安定・繁栄の極致
クロマツ(マツ科)
樹高4m。枝張りは東西に5m、南北に4mほどの調和のとれた樹の姿はどこから観賞しても秀麗である。樹皮は黒っぽく、下部は亀の甲のようにはがれる。枝は、車輪のように出て枝分れし多数の葉をつける。

28 樹勢良好、新緑映える
ケヤキ(ニレ科)
樹齢(推定)：400年。
水田地帯の集落にそびえる樹高25mほどの高木。胸高直径は1mほど。枝張りは東側におよそ5m、西側に13mというのは海からの風のせいだろうか。春、新緑と共に淡黄緑色のこまやかな花を咲かせる樹勢良好な独立樹である。

31 桜はいろいろ
エゾヤマザクラ(バラ科)
樹齢(推定)：40年。樹高10m。枝張りは東西、南北ともに10m。北海道から移転してきた人が何本かの若木を斜面地に移植し、その一本が定着した。ソメイヨシノよりは少し遅れて花を咲かせる。これ一本でお花見の期間が伸びたと喜ぶ人もいる。



32 旧村松村のシンボルツリー
スダジイ(ブナ科)
樹高25mの巨樹。枝張りは東西18m、南北17m。
旧村松村役場跡地に残された村松村のシンボルツリーで、この地には明治時代は村松山の大きな神社があり、本殿は参詣者の休憩地となっていた。無数の葉を茂らせ、堂々たる威容を誇示している。

33 大空の下に凛と
エノキ(ニレ科)
樹高22m。枝張りは東西に20m、南北に27mと樹勢の強さを見せている。新緑の姿はさわやか、夏の緑には涼感、そして冬の寒気に耐える、季節毎の姿は感動的だ。

34 魅せる赤
セイヨウシャクナゲ(ツツジ科)
樹齢(推定)：80年。独立樹。
地上から3mの高さで5本に枝分かれしている。樹勢良好、つぼみ豊富、枝の姿が見事である。3月末に赤い花が咲き、美しい。

35 神を尊ぶ
ヒサカキ(ツバキ科)
樹齢(推定)：120年。主幹は地表部で6本に分かれており、最大の幹の太さは周囲0.9m。それぞれの幹の成長は良く、10m四方に広がっている。樹勢良好、傷がなく、火切にされていることがうかがえる。

36 やさしく人々を見守る
ヤマザクラ(バラ科)
樹齢(推定)：200年。成長は健全で、幹は地上から6mの位置で3本に枝分かれしている。西南に伸長する枝が優勢。独立樹として成長は最晩期。樹勢良好。適度に枝打ちなどの手入れがされている。

38 初夏の薫り
ナツグミ(グミ科)
樹齢(推定)：80年。主幹は斜め上方に伸びており、根元から横に1.5mで幹がほぼ同じ径に分かれている。主幹の太さは上側の幹は1.05m、下側の幹は1.45m。木の高さは5m。枝は南東方向に8m広がる。密状した根姿が良く、花数も多い。